

令和 3 年 6 月 8 日現在

機関番号：17401

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K18659

研究課題名（和文）自己調整学習を越えて：生涯にわたって成長するための学習モデルの開発

研究課題名（英文）Beyond Self-Regulated Learning: Development of Learning Model for Life-Long Learning

研究代表者

合田 美子（Goda, Yoshiko）

熊本大学・教授システム学研究センター・准教授

研究者番号：00433706

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、生涯にわたり成長をするために、自己調整学習(self-regulated learning: SRL)を越えたフレームワークとしての新しい学習モデルを開発することを目的とする。SRLは、基礎的な学習スキルを習得させるというリメディアル的要素が大きい。そのため、本研究では、一生涯学び続ける生涯学習を真に享受するための自律性、継続性、創造性に関する要因を探求し、ペダゴジー(子供を対象とした教授法)、アンドラゴジー(成人学習理論)に加え、ヒュータゴジーと共生、イノベティブマインドなどを取り入れた学習モデルを構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、人生を充実させるための生涯学習に関する要因を探求し整理したことにより、学びに関する観点を多様化させることに貢献できたと考えられる。ペダゴジー、アンドラゴジー、ヒュータゴジーの特徴を再整理し、一生涯学び続ける生涯学習を真に享受するための自律性、継続性、創造性を含む、広い概念の学びには、更に、共生、イノベーションという概念を含む必要があることを提案したことは意義深いと考えられる。社会的意義として、本研究で整理し体系化した、人生を豊かにするための要因などにより、好ましい生涯学習の方向性を示すことができたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to propose a new learning model for the appreciation of learning through the whole of life beyond self-regulated learning (SRL). SRL was originally developed with a remedial purpose to help younger students learn how to learn. However, a framework or model for lifelong learning in this changing society is required. In this research, the factors affecting effective and enjoyable lifelong learning were explored, and the research has resulted in a learning model that was developed based not only on pedagogy and andragogy but also heutagogy and co-existing (Kyohsei) and innovative minds.

研究分野：教育工学、言語教育

キーワード：生涯学習 自己調整学習 学習モデル

1. 研究開始当初の背景

毎週決められた時間に教室で実施される従来型の教育と異なり、オンライン教育では、時空間の制約がなくなりフレキシブルに学ぶことが可能となるが、学習者はいつでもどこのように学ぶのかを自身で決め実行する必要がある、より高い自律性が求められる。これに伴い、自律的学習手法と態度を習得するために自己調整学習(SRL)をベースに学習支援方法が提案されてきている。多くの SRL 実践と研究では、科目の修了率を上げ、課題などを期限内に提出するための支援には、SRL 理論の援用が有効であることが示されてきた。一方で、就業力強化が課題となっている我が国の高等教育機関において卒業後も学習し続け生涯にわたり学ぶという姿勢を育む必要性には、SRL では対応が難しいことが示されてきた。

OCW(Open Courseware)やMOOC(Massive Online Open Course)など教育のオープン化やインフォーマル学習などの新しい教育のムーブメントにおいても、SRL の枠を抜けきらないでいる現状がある。そのため、学びの好機が提供されているにも関わらず、修了率が非常に低く、自由な学びを享受できない学習者が多くいる。また、21 世紀型スキルや学び続けるための学び(Learn to Learn)などが提案されているが、SRL のように具体的なスキルの習得方法などは明確に示されておらず、フレームワークとしては活用が難しい。SRL に類似する理論に SDL(Self-Directed Learning; Knowles, 1975)があるが、SRL 同様に、学習方法に重きをおいているため、育成が急がれているよりイノベーティブな人材に必要な先見性、創造性、リーダーシップ、具現化する力などを育成するフレームワークとしては十分に機能するとは言えない。また、SRL を拡張した社会的共有調整など新しいモデルも開発されてきているが、目の前にある課題をいかに解決するかを扱うモデルとなっている。そこで、今必要とされる人材育成において活用できるフレームワークが不足し、新しいモデルの開発が必要な状況であった。

2. 研究の目的

本研究では、生涯にわたり成長をするために、自己調整学習(self-regulated learning: SRL)を越えたフレームワークとしての新しい学習モデルを開発することを目的とする。自律的学習方法と態度を育成するために、SRL が注目され、国内外で多くの研究および教育実践が行われているが、SRL は、基礎的な学習スキルを習得させるというリメディアル的要素が大きい。そのため、ICT 活用教育、一生涯学び続ける生涯教育を真に享受するための自律性、継続性、創造性を、SRL をベースには育成することは難しい。また、21 世紀型スキルや教育のオープン化、インフォーマル学習などの新しい教育の動向に適応するには限界がある。本研究では、フォーマルとインフォーマルな状況で、能動的に学び続け、創造的でイノベーティブに行動する人材育成を可能にする新しい学習モデルの開発に挑戦することを目的とした。本研究の成果として、現在の学習環境に適応した学習モデルを提案し、生涯学習を享受するための素養を育成するための方向性を示すことを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、研究方法として大きく2つの段階を設定した。第1段階では、生涯にわたり成長を続け、生涯学習を享受するための要因について探索的に調査した。方法としては、国際的教育研究機関(ibstpi)のコンピテンシー開発モデルを援用し、要因の同定と検証を行った。文献調査、生涯学習に関する調査、ハイパフォーマーに関する調査を行った。2017 年度には、フェーズ1(文献と実践のレビュー)を行った。フェーズ1として、学際的に広く文献調査を行った。新しい成人学習理論で課題となっているスピリチュアリティ、アイデンティティ形成、身体を使った学習や非西洋的視点も考慮した。また、人間性心理学や認識心理学など人間の根底にある欲求や動機などにも配慮した。さらに、ハイパフォーマーへインタビューを行い、新しい学習モデルに必要な要素を抽出した。また、文献調査により、本研究で要因の抽出およびモデルの検証で活用するための、関連する

2018 年度には、平成 29 年度に行った国際的教育研究機関(ibstpi)のコンピテンシー開発モデルフェーズ1(文献と実践のレビュー)と、抽出した学習の要素の関連性について、サーベイ調査と有識者レビューを行い、体系的に整理した。キャリアアダプタビリティ、キャリアレジリエンスから

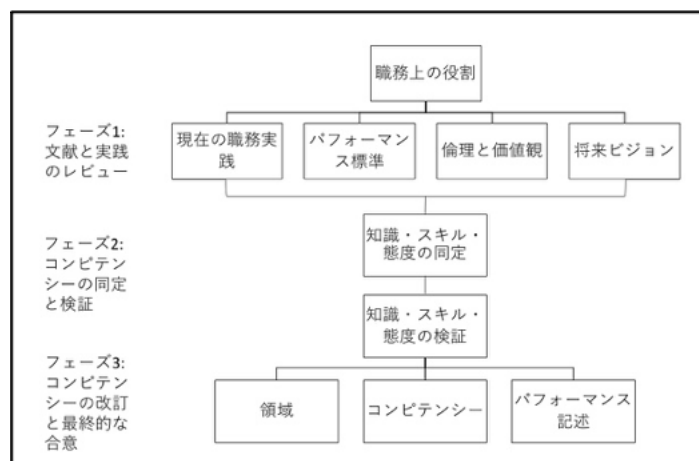


図1 ibstpi コンピテンシー開発モデル

学習の意義づけを行った。サーベイ調査では、高等教育機関において各種尺度によりデータを収集し、各尺度項目間の相関について分析を行った。2019年度は、これまで整理してきた学習モデル案に対して、有識者を対象にヒアリングを行った。また、2018年度に収集したキャリアレジリエンスや生涯学習に関するデータをさらに分析し、モデルの要素間の構造および既存の学習アセスメントとの関係性などを調査した。これらの結果をベースに、モデルの要素、コンピテンシーおよび行動記述への見直しを行い、コンピテンシーおよびモデルを再構築する準備を行った。2020年度は、モデルの妥当性を検証するために、10代から70代までのより幅広い年代を対象に合計2253名に対し、新しい学習モデルに関する質問項目と関連する理論に関する尺度から構成するweb調査を行った。その結果、関連する各尺度とも高い関連性を示し、モデルの妥当性が示された。人生における幸福度に関し、ステップワイズ回帰分析を行った結果、「生きる意味を知っている」という項目が、モデル投入順が最初であり、影響力の多い要素であることが示された。詳細の分析結果は今後研究成果として公表していく。

4. 研究成果

本研究では、生涯にわたり成長をするために、自己調整学習(self-regulated learning: SRL)を越えたフレームワークとしての新しい学習モデルを開発することを目的とした。SRLは、基礎的な学習スキルを習得させるというリメディアル的要素が大きい。そのため、本研究では、一生涯学び続ける生涯学習を真に享受するための自律性、継続性、創造性に関する要因を探索し、ペダゴジー(子供を対象とした教授法)、アンドラゴジー(成人学習理論)に加え、ヒュータゴジーと共生、イノベティブマインドなどを取り入れた学習モデルを構築した。モデル開発の途中で、すでに発表した2つの研究成果について以下にまとめる。生涯学習とキャリアレジリエンス、憧れと人生の目標を持つことの学びへの影響について考察した。

4.1 合田美子・山田政寛・新目真紀・半田純子・長沼将一・上田勇仁(2019.9) 大学生の生涯学習とキャリアレジリエンスの関係。第44回教育システム情報学会全国大会(静岡大学)発表論文集, 53-54

本研究は、大学生の生涯学習スキルとキャリアレジリエンスの関係を明らかにすることを目的とする。工学部2年生68名の生涯学習尺度(Wielkiewicz & Meuwissen, 2014)とキャリアレジリエンス尺度(児玉, 2015)に対する回答を分析した。その結果、生涯学習と、キャリアレジリエンス全体および下位5要因すべてに有意な相関がみられた。生涯学習の項目毎とキャリアレジリエンス全体との分析では、「学んだことを他の人と会話する」が最も正の相関が高く、「私は批判的思考をとる」には有意な相関は見られなかった。

4.1.1 はじめに

高等教育において、卒業後も主体的に活躍できる人材を育成することが期待されており、その中で、生涯学び続ける基礎を培い(1)、キャリアレジリエンス(CR)と呼ばれる、充実したキャリアを形成するための資質が求められている(2)。

CRとは、キャリア形成を脅かすリスクに直面した時、それに対処してキャリア形成を促す働きをする心理的特性と定義され(3)、社会や仕事の変化にかかわる危機に対応し回復する力である。CRを効果的に機能させるためには、状況を見極めたり、失敗から学んだり、学びが関係すると考えられる。そこで、本研究では、大学生の生涯学習とCRの関係を明らかにすることを目的とした。

4.1.2 研究方法

・調査方法と調査対象者

2019年1月にMoodle上のアンケート機能を使い質問紙調査を実施した。質問紙には個人を特定することはないと明記し、口頭でも本調査への参加は任意であることを伝えた。対象者は、国立大学工学部2年生93名(男性74人、女性19人)であり、欠損値を含まない有効回答数は、68人(男性52人、女性16人)であった。

・質問紙

生涯学習に関しては、Wielkiewicz Lifelong Scale (LLS) (4)を採用した。LLSは、5段階リッカート尺度で16項目から構成される。

CR測定には、児玉(2015)が開発した尺度を使用した(3)。尺度は、4段階リッカート形式の34項目から構成され、問題適応力、ソーシャルスキル、新奇・多様性、未来志向、援助志向の5要因が含まれる。

4.1.3 結果

未来志向が低い結果となった。LLSとCRの相関について、LLS全体(合計)は、CS全体、CS各要因と有意な正の相関があった。LLSの項目毎とCR全体の結果を見ると、「私は新しく学んだことについて他の人と会話する」がCR全体と最も相関が高かった。「私は批判的思考をとる」のみ、有意な相関が見られなかった。

4.1.4 考察

生涯学習とキャリアレジリエンスには、正の関係が存在することが示唆された。学習の仕方では、他の人と学ぶ方法は、キャリアレジリエンスと高い相関が示された。批判的思考とは、相関が見られなかった。これは、大学生の批判的思考の捉え方が意図したものと異なっていた可能性がある。また、相関が低めの項目には、LLSの項目が、動画から学ぶなどを含まず、現在の学習方法に合致していないことに起因するとも考えられる。

4.2 合田美子・山田政寛 (2020.9) 憧れや目標を持つことの学びへの影響 -大学生における生涯学習とキャリアレジリエンスとの関係-。第45回教育システム情報学会全国大会 (オンライン) 発表論文集, 183-184

本研究は、憧れや人生の目標を持つことがどのように学びに影響しているかを明らかにするための基礎研究である。大学生 67 名を対象とし、それらが生涯学習やキャリアレジリエンス (CR) とどのように関係するかを明らかにすることを目的としている。生涯学習尺度 (Wielkiewicz & Meuwissen, 2014) と CR 尺度 (児玉, 2015)、やりたいことの方向性、憧れ・目標に関する 2 つの質問への回答を分析した。憧れや目標を持っていることは、生涯学習および CR の 5 要因のすべてに、やりたいことの方向性は、CR の未来志向以外の要因と正の相関があった。また、重回帰分析の結果、大学生の時点で、やりたいことの方向性、憧れや目標を持つことは、生涯学習や CR の分散のうち、半分程度を有意に説明していた。

4.2.1 はじめに

憧れや夢、理想、目標などを持つことは学習の動機に繋がるとされてきた。小さい時の感激や感嘆がその後の人生に影響するという報告もある。ギフト教育においても、憧れや目標はその後の学習にとって重要な要因である。自己調整学習や共調整学習、社会的共有学習は、学校教育の成功に必要とされる。一方、変化に富み多様な社会へ適応するために、生涯学習⁽¹⁾や、リスク対処、キャリア形成を促す心理的特性であるキャリアレジリエンス (CR)⁽²⁾が必要である。CR は、失敗から学ぶなど、学びと関係がある。大学生の生涯学習と CR 全体は、有意に関係しているとされる⁽⁶⁾。学校教育で成功するだけでなく、社会に適応し、生涯を通じ、主体的に学び続けるために考慮すべき要因を探るため、憧れや目標を持つことの学びへの影響を調査する。本研究は基礎研究と位置づけ、大学時点で、人生の方向性、憧れと目標が、生涯学習、CR とどのように関係しているのかを明らかにすることを目的としている。

4.2.2 研究方法

・調査方法と調査対象者

2019 年 1 月に Moodle 上のアンケート機能を使い質問紙調査を実施した。データ収集にあたり、研究の目的とデータの使途、参加の任意性を説明した。対象者は、国立大学に所属する大学生 67 人 (男性 51 人、女性 16 人) であった。

・質問紙

質問紙は、2 尺度合わせて計 50 項目と、方向性、憧れ・目標に合う質問 2 項目の合計 52 項目と影響をうけた事柄についての自由記述を含んだ。生涯学習に関しては、Wielkiewicz Lifelong Scale (LLS)⁽⁴⁾を採用した。LLS は、5 段階リッカート尺度で 16 項目から構成される。CR 測定には、4 段階リッカート形式の 34 項目から構成される児玉 (2015) の尺度を使用した⁽³⁾。問題適応力、ソーシャルスキル、新奇・多様性、未来志向、援助志向の 5 要因が含まれる。著者らが用意した 2 項目は、「Q1 幼いころからやりたいことの方向性にブレはない」「Q2 こんな人になりたい、こんなことをしたい、こんな生活をしたい、という憧れや目標がある」であり、4 件法で回答してもらった。自由記述では、「これまでの人生で、影響を強く受けたもの、こと、ひとについて、記述してください。いつごろ、それは起こり (出会い)、その時に感じたことを書いてください。また、そのことを今、どのように感じているか書いてください。もし、影響を受けたもの、こと、ひとがない場合は、大切にしている言葉または好きな言葉について、説明してください。」と指示した。

4.2.3 結果

やりたいことの方向性と憧れ・目標への回答について、やりたいことの方向性を持ち続けている学生は約半数いた (選択肢 3 と 4 の合計 53.73%)。また、憧れや目標を持っている学生は 61.20% であった。方向性と憧れ・目標と、LLS 全体と CR の 5 要因の相関については表 1 の通りである。憧れや目標を持っていることは、生涯学習および CS の 5 要因のすべてに、やりたいことの方向性は、CS の未来志向以外の要因と正の相関があった。LLS 全体、CR 各要因を従属変数、

質問2項目を独立変数とし重回帰分析を行った。この2項目で、LLS全体、CRの各要因を有意に説明しているという結果になった(LLS: $R^2 = .40$, CR1: $R^2 = .55$, CR2: $R^2 = .68$, CR3: $R^2 = .58$, CR4: $R^2 = .65$, CR5: $R^2 = .48$)。

自由記述を分析すると、未記入または特になしという回答の学生が17名いた。その他の50名は、影響のあった事項または好きな言葉などを、自己の経験を踏まえて具体的に記述していた。例えば、「私は父が技術者ということもあり、いつも近くで機械などをいじっている父の姿を見てきた。そのため、私も機械などをいじるのに興味が出てきて工学部の進学を決めたきっかけの一つになっている。これから、新しい時代になってくるにつれ機械などがさらに発達してくると思われるため、街づくりなどに役に立つような研究などをしていき少しでも貢献していきたいと考える。」。

4.2.4 考察とまとめ

やりたいことの方角性、憧れや目標を持つことと、生涯学習とCRには、正の相関が存在する結果となった。また、方向性と憧れ・目標をしっかりと持っていることで、生涯学習とCRが有意に高くなる可能性が示唆された。大学生の時点でのやりたいことの方角性、憧れ・目標をもつことは、社会に適応するための継続的な学びに対し肯定的な影響がある可能性が示された。今後は、学びの他の側面も考慮し、大学生だけでなく、幅広い年代の対象者において調査を行い、生涯にわたる学習に影響する要因を更に明らかにしていきたい。本研究の意義として、年代に合わせた学び、成長に合わせたフィードバック、支援をするための手法をデザインするための基礎情報を提供することが挙げられる。

表1 方向性と憧れ・目標と、LLS全体とCRの5要因の相関

		Q1やりたいことの方角性	Q2憧れや目標	生涯学習	CR1チャレンジ	CR2ソーシャルスキル	CR3新奇性	CR4未来志向	CR6援助志向
Q1 幼いころからやりたいことの方角性にブレはない	Pearson r	1.00	.60**	0.21	.50**	.61**	.48**	0.19	.34**
	p		0.00	0.09	0.00	0.00	0.00	0.12	0.00
Q2こんな人になりたい,こんなことをしたい,こんな生活をしたい,という憧れや目標がある	Pearson r	.60**	1.00	.52**	.64**	.72**	.68**	.69**	.56**
	p	0.00		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00

注: * < .05, ** < .01, $N = 67$.

参考文献

- (1) 中央教育審議会: “初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申). 第3章高等教育の役割” (2009)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/attach/1309749.htm (アクセス:2019年6月17日)
- (2) 児玉真樹子: “大学生用キャリアレジリエンス測定尺度の開発,” 学習開発学研究, Vol. 10, pp. 15-23. (2017)
- (3) 児玉真樹子: “キャリアレジリエンスの構成概念の検討と測定尺度の開発”, 心理学研究 86, pp. 150-159 (2015)
- (4) Wielkiewicz, R. M. and Meuwissen, A. S. “A Lifelong Learning Scale for Research and Evaluation of Teaching and Curricular Effectiveness,” Teaching of Psychology, Vol. 41, No. 3, pp. 220-227 (2014)
- (5) 合田美子, 山田政寛, 新目真紀, 半田純子, 長沼将一, 上田勇仁.: “大学生における生涯学習とキャリアレジリエンスの関係”, 第44回教育システム情報学会全国大会, pp. 53-54. (2019)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 合田美子	4. 巻 50(4)
2. 論文標題 インストラクショナルデザインによるオンライン教育の質保証	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 品質	6. 最初と最後の頁 36-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20684/quality.50.4_300	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Goda, Y., Sudo, K., Hommyo, S.	4. 巻 2020
2. 論文標題 Design of a Self-Development Support System for Workplace Learning	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 2020 IEEE International Conference on Teaching, Assessment, and Learning for Engineering (TALE)	6. 最初と最後の頁 980-983
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1109/TALE48869.2020.9368394	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Yamada, M., Goda, Y., Egi, H.	4. 巻 2019
2. 論文標題 The effects of seat location-based teaching assistant support system on the awareness of self-regulated learning and learning performance	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of IEEE TALE 2019	6. 最初と最後の頁 625-631
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 合田美子	4. 巻 Vol .59, No. 1
2. 論文標題 インストラクショナルデザインを概観する	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 看護教育2018年1月号 特集 インストラクショナルデザインを活かす	6. 最初と最後の頁 10-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計20件（うち招待講演 9件 / うち国際学会 12件）

1. 発表者名 Takabayashi, T., Goda, Y., Suzuki, K.
2. 発表標題 From COVID-19 to Adaptive Education in Times of Emergency and Crisis (I)
3. 学会等名 AECT Convention 2020 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Goda, Y., Sudo, K., Hommyo, S.
2. 発表標題 Design of a Self-Development Support System for Workplace Learning
3. 学会等名 IEEE TALE 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 合田美子・山田政寛
2. 発表標題 憧れや目標を持つことの学びへの影響 -大学生における生涯学習とキャリアレジリエンスとの関係-
3. 学会等名 第45回教育システム情報学会全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 合田美子, 山田政寛
2. 発表標題 憧れや目標を持つことの学びへの影響 - 大学生における生涯学習とキャリアレジリエンスとの関係 -
3. 学会等名 教育システム情報学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Goda, Y.
2. 発表標題 Special Session 2: Technology and Education in Japan: Research, Practice, and More (趣旨説明)
3. 学会等名 IEEE TALE 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中村俊介・合田美子・山田政寛
2. 発表標題 【次世代集合研修(オンライン集合研修)トラック】「次世代集合研修」を探求する～
3. 学会等名 eラーニングアワードフォーラム (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Takabayashi, T., Goda, Y., Katsuaki, S.
2. 発表標題 From COVID-19 to Adaptive Education in Times of Emergency and Crisis (I)
3. 学会等名 AECT 2020 Virtual International Convention, Association for Educational Communications and Technology (AECT) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yoshiko Goda
2. 発表標題 How to Integrate Theory, Practice, and Technology for Balanced Data-Driven and Knowledge-Driven TELL
3. 学会等名 FLEAT (International Conference on Foreign Language Education & Technology) 2019 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 合田美子
2. 発表標題 Lecture 4. テクノロジーで実現する アダプティブラーニングのためのELT教材の開発と活用法
3. 学会等名 The 2nd JACET Summer(46th) and English Education(7th) Joint Seminar (Tokyo, 2019) (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 合田美子
2. 発表標題 教育講演3. 日本の呼吸療法に 関わる医療スタッフ が備えるべきコンピテンシーの探求のために
3. 学会等名 第29回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 合田美子・山田政寛・新目真紀・半田純子・長沼将一・上田勇仁
2. 発表標題 学生の生涯学習とキャリアレジリエンスの関係
3. 学会等名 第44回教育システム情報学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Goda, Y.
2. 発表標題 Beyond Self-Regulated Learning: New Directions and Challenges in Learning
3. 学会等名 台湾亜細亜大学主催 Artificial Intelligence Forum IV (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yamada, M.
2. 発表標題 What does learning behaviors promote the sense of self-regulated learning? -From learning analytics view-
3. 学会等名 台湾亜細亜大学主催 Artificial Intelligence Forum IV (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 合田美子, 松葉龍一, 久保田真一郎, 平岡齊士, 石毛弓, 長沼将一, 八木秀文
2. 発表標題 全国大会プレカンファレンス「オンライン学習で成功するためのレディネス：オンライン学習者のリテラシーとは？」
3. 学会等名 第43回教育システム情報学会全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ishige, Y., Tanigawa, H., Nagao, K., Kabeya, K., Goda, Y., Kasamura, J., & Watanabe, H.
2. 発表標題 The Learning Assistance System in Japan in 2018
3. 学会等名 College Reading and Learning Association, The 51st Annual CRLA Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Li, C., Uemura, H., Hao, H., Goda, Y., Okubo, F., Taniguchi, Y., Oi, M., Konomi, S., Ogata, H., & Yamada, M.
2. 発表標題 Relationships between Collaborative Problem Solving, Learning Performance and Learning Behavior in Science Education
3. 学会等名 IEEE TALE 2018: Education and Technology Conference 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yamada, M., Shimada, A., Oi, M., Taniguchi, Y., & Konomi, S.
2. 発表標題 BR-Map: concept map system using e-book logs
3. 学会等名 CELDA 2018 : 15th International Conference on Cognition and Exploratory Learning in Digital Age 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoshiko Goda
2. 発表標題 Effective TELL for Self-Regulated Learning and Collaborative Learning
3. 学会等名 International Conference on Computers in Education (ICCE2017) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 合田美子(山田政寛, 松田岳士, 加藤浩, 齋藤裕, 宮川裕之)
2. 発表標題 学習方法の選択に関する認識と実際の学習行動の関係が学習成果に及ぼす影響
3. 学会等名 日本教育工学会 全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Masanori Yamada, (Yoshiko Goda)
2. 発表標題 The Effects of Social Presence Visualization based on Community of Inquiry Framework
3. 学会等名 Society for Information Technology and Teacher Education (SITE2018) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Goda, Y., Yamada, M., Matsuda, T., Kato, H., Saito, Y., & Miyagawa H.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 IGI Global	5. 総ページ数 323, pp. 218-238
3. 書名 From Adaptive Learning Support to Fading Out Support for Effective Self-Regulated Online Learning. In Danny Glick, Anat Cohen, Chi Chang, Early Warning Systems and Targeted Interventions for Student Success in Online Courses	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	山田 政寛 (Yamada Masanori) (10466831)	九州大学・基幹教育院・准教授 (17102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
その他の国・地域	台湾	成功大学	